
困った時のカミ頼み

三河あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

困った時の力ミ頼み

【Nコード】

N1508E

【作者名】

三河あおい

【あらすじ】

元ヤンの秀仁はあおいと付き合うために、今日も『髪之神』と共にあらゆる努力をするのだ！普通ではないラブコメ（？）が始まった。

第1話 オープニング

人間というものは、必ずといっていいほど一つの事に夢中、熱中をしている。それがスポーツとか読書とか音楽とか、勉強とか（少なくとも、俺の周りにはそんな人種は存在しない）。だがしかし俺は違う。俺が今熱中しているもの。

それは・・・恋だ！またの名を恋愛だ！話を言う前に一つ言っておこう。こんな話し方をしているが、僕は元々、いわゆる『不良』^{ヤンキー}という人種だ。それを分かった上で聞いてほしい。

始まりは、とてもありふれたものだ。いや、こんな奴にとっては全裸で富士山を下山できたくらいの奇跡だった。

アレは、この高校の入試のときだった。

テスト中に俺は、シャーペン^{シャープペン}を落としてしまった。当然ながら、拾おうとしてもその行動がカンニングと見られてしまうのだ。予備のシャーペンも出したが、そのペンには芯が入っていなかった。得意科目の国語が出来なければ、俺は当然、この高校に合格などできない（できてもギリギリなんだが・・・）。まあとにかく、俺が途方にくれたときだった。

（ね、これ使う？）

隣から小さく聞こえてきた。ちょうど先生も居ないときだったから、僕は隣に首を向けた。その時、僕は思わず固まった。声をかけた主は、背中を軽く覆う程の髪、整った顔立ち、モデルのような外見の綺麗な女子だった。俺はしばらく動けなかった。

（早く。先生が戻ってくるから。）

あえてもう一度言おう。当時の俺は不良だ。^{ヤンキー}髪だって赤に近い茶

色だったし、全員の制服が夏服の中、俺一人が、冬用の学生服を着ている。そんな人間にこんな綺麗で、優しい人が話しかけてきた。もはや、奇跡という言葉では軽い気がする。とにかく、俺は彼女から受け取ったシャーペンで、この高校に合格することが出来た（もちろんギリギリ）。

そして、俺は無事入学して、5月ごろに気付いた。僕は彼女に恋をしていることを。

そして現在。

髪も黒に戻して、不良を引退することを決意した。全ては、彼女のために。俺は、それらの決意がウソじゃないことを誓いに、神社に来ていた。俺は賽銭箱に五円玉を一枚入れた。

「これぼつちしかないけど、俺は不良から足を洗います。そして、彼女……椎名^{しいな}あおいと……こ……交際させてください。」

……思わず声に出してしまった。まあ、決意表明ということでもいいだろう。

「……さて、行くか」

桜が並ぶ神社に背を向け、僕は彼女に会いに学校へ行った。

第1話 オープニング（後書き）

無謀にも同時連載を始めます。

読者のみんな、作者に元気を分けてください。

できるだけ早く更新するようによにします。

第2話 悲劇は突然おこるもんだ（前書き）

こんな感じの小説なのでよろしくお願いします。

第2話 悲劇は突然おこるもんだ

この門をくぐって早一ヶ月。落ち着いて考えたら、彼女とまともに話をしたのはほとんどない。というより、ペンを借りて、返してもらっただけ。少なくとも、彼女から見たらそれだけの仲だろう。

「はぁ・・・どーすっかな・・・」

そんな事を考えてブルーな気持ちになってるときだった。

「よお秀仁君^{ひでと}。朝から誰か死んだみたいな顔してさ。」

「バカ言っなよ。」

そんな俺に気軽に話しかけてくるのは、中学からの知り合いの川瀬修哉^{しゅげ}だ。その前に自己紹介が遅れた。俺の名前は稲葉秀仁^{いなば ひでと}だ。何度も言うが、『元』不良^{ヤンキー}だ。一応言っておくけど、川瀬は別に俺と同じではない。むしろ、僕と一緒にいるのがおかしいほどの真面目で、普通の人だ。

「しかしアレだね。秀仁君はあおいさんと同じクラスなのにまだ一言も話してないって・・・」

「だってしょうがないだろ。あおいさんがそこいるだけで、俺は息を止めてしまうんだぜ。コレを緊張といわないでなんて言う？」

「じゃ、バカってことでいいでしょ？」

「誰がバカだって、おい？」

俺が川瀬のブレザーの胸ぐらを掴んだときだった。

「おはよう。朝から元気だね。」

「「お・・・おはよう・・・」」

あおいさんが、一点の曇りのない笑顔を向けながら校舎へと入っていった。

「・・・やっぱり、お前から見ても、あおいさんって綺麗だよな？」

「それはそうでしょ。その辺の秀仁君の見る目はすごいと思うよ。」

『全く。無謀という言葉を知らんのか？アホめ』

「最後のアホってなんだ！お前の事やっぱいいヤツだと思った俺がバカだったぜ！」

「誰もアホって言うてないよ！とりあえず、ボク教室に行くから」
「待てコラ、逃げ・・・」

川瀬を追おうとした瞬間だった。

『まあ、止まれヒデトとやら。』

俺は思わず止まってしまった。その声は、明らかに高校生ではなく、表現をするなら『仙人』ってイメージの、老けたような声だった。その声がどこから聞こえるのかが分からない。

「・・・誰だ。姿隠してないで出て来いよ。」

『落ち着け。今教えるから。』

その瞬間。俺の髪の毛が急激に引つ張られた。

「痛ててて！！誰だよ！！・・・って誰もいないじゃん・・・」

『自己紹介をしよう。私は力ミだ。』

「・・・まさか俺の髪の毛のことじゃないよな？」

『少し違うな。私は、お前の髪の毛にいる『神様』だ、ということだ。』

「・・・は？」

今どんな状況なんだ？誰か説明してほしい。

第3話 腐れ縁の予感

その日、俺は学校を休んだ。本当の意味で『正気を失う』所だったからだ。俺は自分の部屋にこもって、『カミ』と会話をしていた。
「・・・で？なんなんだお前は。分かりやすく説明してほしいんだが」

『そうだな。ここにいるのは私とお前の2人だ。細かく説明しよう。何を聞きたい？』

「ありすぎて困るんだよ。・・・なんでソコにいるんだ？」

『それはだな。お前は朝、賽銭箱に五円をいれてこう願ったろう？『足を洗いたい』と『交際をしたい』と』

正直、俺はものすごい動揺した。俺は周りに人がいないかを15回も調べた。けど、誰もいなかった。

「な・・・なぜ・・・それを・・・」

『私はその時、お前の願いを叶えてやろうと、お前のそばについてさまざまな運を呼ぼうとした。・・・だがしかし！』

「だがしかし？」

『・・・ミスって憑いてしまった・・・しかも、髪の毛に・・・な』

「なんじゃそりゃ！ふざけんなー！」

その上、このカミはどこか自信満々にしゃべるから余計にむかつく。

「いや、待てよ。といってもあんたは神なんだろ？早く髪から離れろよ」

『私だつて出来るならとくにそうしてるわ』

ものすごい嫌な予感がした。俺はおそろおそろ聞いた。

「・・・ってことは？」

『・・・離れないんだ・・・どういうわけか』

「なんじゃそりゃ！！マジふざけんなー！！」

今の俺は、すでに驚きより怒りの方が勝っていた。

「今すぐ髪切ってやる！」

「ムダだ。全ての髪の毛が私なんだ。切った所でどうにもならん。」

「くっそう、それなら髪を抜いてやる！」

俺は力強く髪を握り締めた。

『断っておくが、今私の命とお前の命が、髪の毛で繋がっているらしいから、間違ったらお互い死ぬぞ』

一瞬にして手の力が抜けた。俺はがつくり膝をついた。ようするに、離れる方法がないわけなのか・・・

『まあ、心配するな。少なからず『私』という神が憑いているんだ。お前の願いを叶えてやろう。文字通りの『二人三脚』でな。』

「・・・くそつまらんギャグだな・・・」

願った覚えのない不幸が現れたもんだ・・・

こうして俺はこのカミと一緒に奇妙な高校生活が始まった。

第4話 口は災いの元

現在、昼飯時間。

「遅かったね、秀仁君。今日は休むかとおも・・・どうしたの？
顔色悪いけど。ご飯食べた？」

「・・・バツチリに決まってるんだろ。」

顔色が悪いのは、朝ご飯を食べなかったからでも、体調が悪いからでもない。あまり話したくはないが、

「・・・立ち直ったばっかだからな・・・」

「立ち直る？何から？」

「・・・トラウマ・・・」

「？ 朝からトラウマって大変そうだね。」

もし、実際に自分の神・・・いや自分の髪に神がのり移ったら、間違はなく大変じゃすまないだろう。ある意味、地獄としかいえない。

『おい、ヒデト。』

「外では話し掛けるな。声が聞こえたらどうするんだよ。」

『問題ない。私の声はお前以外には聞こえない。大声で叫ぼうと、こんな事をしようがな・・・』

ギユウウウツツ

「ぐああー！頭がー！」

「ひ、秀仁君！大丈夫！？」

クツ・・・調子に乗りやがって・・・この神があー！

「・・・あんま調子にのんなよ・・・」

「秀仁君？ボクは別に何も・・・」

『すまん。私はいたぶるのが趣味なんですね』

「もう我慢ならん！ぶつ殺す！」

「ちよ、ちよつと秀仁君、どうし・・・」

「オラア、喰らえやあー！」

俺は勢いよく髪を掴むと、ありったけの力で髪の毛を抜いた（だいたい10本前後）。

『だから最初に言っただろう。私とお前は繋がっているのだと。今でも、多少の寿命は減ったぞ。』

生きてるし。しかも、そう言えばそうだった。しかし、それ以上に恐ろしい事態が起こった。

「・・・秀仁君。さっきからどうしたの？誰かと話してる風に見えるけど・・・」

とすると、あれか。俺がさっきからやってたのは、周りからみれば、ただのひとりごとなのか・・・その上、教室中が静まり返り、皆がこつちを見ていた。この状況をどうやって回避しよう・・・

「・・・ほら・・・アレだよ・・・アレ・・・知ってるだろ？」

こ、言葉が出てこない・・・俺は言い訳に使えるものを探すために、辺りを見渡しながらしやべった。

「アレって・・・何？」

「ほら・・・アレって言ったら・・・アレだろ？」

「だから、アレって何？しかもなんでキョロキョロしてるの？」

「いや、だから・・・アレだって・・・」

俺は、偶然運動場を見た。すると、この状況を逆転する奇跡が訪れた。

「そうだ！果たし状がきたんだよ！」

「はっ？誰から？」

「アレだよ、アレ」

俺は運動場にいるある男を指差して言った。もちろんその男が知り合いだから、尚、事も運びやすいだろう。クラス中が驚いた。

「アレて・・・1コ上の霧沢春一さんきりさわはるいちだろ？そんな人とケンカする気かよ。」

「ああ。久々にあったと思ったら、決着ケリをつけようぜ、なんて言われたら気合はいるだろ？」

もちろん、ウソだ。後は適当にごまかすか。

「それで？いつ鬭^やるの？」

それは、俺の知らない男の発言だった。俺はこの後、今の会話を作^さったのを後悔した。

「・・・聞いてどうするんだよ？」

「観に行くに決まってるだろう。あの人と対等にケンカできる奴^{やつ}って滅多にいないからなさ。皆も観てみたいだろう？」

「・・・おおおおー！！！！」

「みんなの意見は決まったからな。・・・でいつするの？」

俺はもう後に引けないのが分かった。俺は、脱力して言った。

「・・・明日放課後・・・屋上・・・」

なんで俺、あんなこと言^いったんだろう・・・俺は神^{かみ}のせいだという事にした。

第5話 自分からした約束を自分で破るのって以外に勇気が必要

『どうしたヒデト。やつれた顔をして』

「いや、どうしたもなにもお前が原因だろ！」

トイレの個室にこもって、独り言をする俺。今が放課後でよかった。この時間帯なら誰もトイレに来るような事はないし、安心できる場所だ。

「いいか？俺は健全な校高生活を送りたいだけなんだ。どうしてこう、邪魔をするんだ。」

『邪魔って、私の声がヒデト以外に聞こえないのは説明していただろう。それを忘れて怒りに走ったのは誰だ？』

「そもそも、人の多い場所で話し掛けるなって、前から言ってるよな？お前こそ・・・痛ででえ！！分かったから、引っ張るんじゃないねえ！」

コイツ、状況が不利になると別の意味で厄介だな・・・

「・・・分かった、落ち着こう。とにかくこのケンカの話は無かった事にしよう。俺の負けってことにすれば一番簡単だしな。一応春一さんに話してみる。」

『なるほど。最低限の知能はあるみたいだな。けどヒデト・・・』

「何だよ、もったいぶって。遠慮なく言えよ。」

『『校高』生活じゃなくて『高校』生活だ。漢字が逆だぞ。』

ただの会話でそこまで読み取らなくていいんだよ、別に・・・

「春一さん、いるかい？」

俺は春一さんのいる2・Cの教室の戸を開けた。放課後だから全く希望は無かったが、奥の窓際の席に春一さんが絵を描いていた。夕日を背に、ノートに2Bの鉛筆を走らせる春一さんの姿に、少し

大人びた雰囲気が出ていた。

「春一さん。少し話しても大丈夫ですか？」

「……ん？ ああ、ヒデか。久しぶりだな！まあ座れよ。」

春一さんは、自分の隣の席から椅子を引いて強引に俺を座らせた。

「見ろよ。良い絵とは思わんか？」

そう言っ僕に見せた絵は、ポ モンに出てくるメタンが見事に巻かれたウ チに変身したと思う絵（しかもかなり上手い）が出てきた。

「なんでそんなモン描いてるんすか？！間違いなく放課後描く必要も意味もないでしょ！」

「いやー、一応三十分かけた力作なんだが……」

「別ので頑張っして下さい！」

「で、話があると言ってなかったっけ？」

「……すっかり忘れてた。よし。聞いてみよう。」

「……春一さん。俺と春一さんがタイマンするって話し聞きました？」

「ああ。今日はオレは知らないけどその話題で盛り上がった。」

「頼みがあります。そのタイマン俺の負けっ事にしてくれますか？」

「確か、このケンカはお前から売ったと聞いたが？」

「確かにそうです。けど、辞退させてもらえますか？」

俺は頭を下げようとした瞬間だった。気がいたら、胸ぐらを捕まえられていた。

「……お前。なめてるのか？」

「……やばい。かなりまずい展開になってきた。」

第5話 自分からした約束を自分で破るのって以外に勇気が必要（後書き）

こちらもうご無沙汰です
よろしくです

第6話 話し合いでも友情は得られる

「お前はケンカ売った本人が逃げるのが、どれだけ最低か分かってるのか？」

春一さんは、何に対しても正直で、正々堂々する人間だった。そんな性格だったのを忘れていた。

「・・・春一さん。俺だってこんな事したくないんですよ。けど、俺はもうケンカしたくないんですよ。」

「うるせえよ！卑怯者が！」

春一さんが拳を振り上げた。俺は防御をしようとも、殴ろうともしなかった。もともと、俺の嘘でこうなったのだから殴られてもしようがないと思っていた。だから、ただ歯を食いしばっていた。しかしいくら待っても拳が振ってくる事は無かった。

「・・・ケンカはしたくない、って言ったよな？」

代わりに思いもよらぬ言葉が降りてきた。あまりにも急な事ですこし驚いてしまった。

「は、はい。そうですけど。それが？」

「何か理由でもあるのか？やるって口にしたら必ず実行するお前が実行しないって、なにかあるんじゃないのか？話してみなよ」

春一さんにはさっきまでの怒りの表情はなく、さっき会ったばかりの、柔らかな笑顔で話し掛けてきていた。

「ええ。実は・・・」

俺はそこで口を止めた。『好きな人がいるから』って言うとしたが、普通にそう言うのがかなり恥ずかしくなってきた。ていうか、普通は言わないものだろ。俺は違う言葉を出した。

「実は俺、高校に入ったら、不良を辞めようと決めていたんです。」

「なるほど。で？不良を辞めるにも、なにか理由があるだろう？」
「ヤバイ！この人めちゃくちや鋭いんだった。しかし、簡単にバレ

るはずが無い。その自信が俺にはあった。

「じゃあ当てるか。お前、多分好きな人でもいるんだろ？」

「……………本当に人間なのか、春一さんは。俺は恥ずかし
涙が出てきた。」

「すいません。俺ってそんなに分かりやすいんですか？」

「いや、偶然だよ。オレもお前と同じ立場だからさ。」

同じ立場ねえ……………ん？

「……………もしかして、春一さんも好きな人が？」

「いやあ……………そうなんだよな……………だからオレも不良なんかやめ
て、好きな人間のために生きようって思ったんだよ。無駄なケンカ
はしなかったり、弱いものを助けたり、そんな人間になりたいんだ。」

春一さんは恥ずかしそうに顔を赤らめながら照れくさそうに話し
た。けどその話し方には強い決意が見えた。

「確かに。俺と同じですね。」

「……………なんか、アレだな。中学校以来じゃね？こんなに
喋ったのって」

言われてみればそうだ。中学校時代、同じ『不良^{ヤンキー}』という種類に
いたが、こんなに明るく会話をしたのは、ひよっとしたら、初めて
かもしれない。

「恋する元ヤン同士、頑張ろうぜ。」

「……………そつすね」

俺たちは夕日を背に、軽く拳を作って軽くぶつけ合った。俺たち
は単なる『友達』から『同士』へと変わった。

最終話 別れには運命のような、どうしてもない理由が存在したりする（前書

なんだかんだで最終話です。

最終話 別れには運命のような、どうしようもない理由が存在したりする

『いやいや、世の中分かんものだな。』

「お前が言うな。」

あの事件が終わって数日、俺はクラスのちよつとした英雄と化していた。話し合いだけで上級生を倒したという、あるはずのない噂話まで出てきてやっかいなところだ。クラスの人間に無いウソをついてごまかすのも、結構、つらいものだ。

「元々お前が余計なことさえ言わなかったら、春一さんともめなかったし、根本的に、こんな事も何も起きなかったのに・・・」
「た〜く」

「まあ、いいじゃないか。ちゃんとした友人もできたことだし、その上このクラスと仲良くなったんだ。なんの損があるというのだ？」

「・・・もういい・・・なんでもない・・・」

コイツはお母さんか？こういう世話好きな奴が俺から見たら面倒なものなのに・・・

『残念だが、聴こえているぞ』

「分かった！俺が悪かったから髪を引つ張らないでくれ！」

・・・クラスが静まり返る・・・

「・・・いや・・・寝癖つて意外と治りにくいもんだな」

苦しすぎる・・・さすがに無理だと思ったら、またみんなは、元の話題に戻ったようだった。

「今のはちよつと危なかった・・・かな？」

『ヒデト、今のは冴えていたぞ。』

お、珍しく褒められた。普段から褒められないから、いざ褒められると地味に嬉しくなってきた。

「ま、俺もちょっとは成長したってことだらけだな。」

『だが勘違いするな。お前のゴールはソコじゃない。アレだろう？』

コイツに言われて、俺は思わずあおいさんの方へ目を向けた。

「・・・悪いけど、まだゴールは速いと思うから自分のペースで行くわ」

俺はそう言つと、ゆっくりあおい・・・さんの方へ歩を進めた。

最終話 別れには運命のような、どうしようもない理由が存在したりする（後書

2作の連載に限界が見えたので、筆者の身勝手な都合により、この話で終了します。

苦情はあまり聞き入れません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1508e/>

困った時のカミ頼み

2010年10月8日23時14分発行